

中国語のすすめ

➤ 外国語を学ぶ意味

外国語を学習する動機には、人それぞれ様々なものがあると思います。中国語であれば、「中国でのビジネスに必要」、「中国・台湾へ旅行に行きたい」、「(『三国志』や『キングダム』といった) 漫画・アニメで中国に興味を持った」…等がよく聞かれる所ですが、実際に今この文章を読んでいる人で一番多いのは、「大学の必修科目だから」かもしれません。かつては多くの大学で「第二外国語」(一橋では「初修外国語」と呼ばれます) が必修とされており、現在は大学によって状況が変わってきていますが、一橋では法学部と社会学部の学生は依然として必修です。大学が必修にしているということは、それぞれの専門分野を学ぶために外国語が必要だということでしょうか。勿論そういう場合もあると思いますが、例えば一橋の法学部生や社会学部生でも、各自の専攻や学習内容によっては必ずしも第二外国語が必須という人ばかりではないでしょう。だとすれば全員を必修にしなくても、必要な人だけが選択すればよいのではないのでしょうか。

上で挙げたような学習動機は、どれも何か他の目的のための「道具」として外国語を学ぼうとするもので、そのように考える限り、必要か不要かは確かに人によります。けれども、言語を学ぶことの意味はそれだけに止まりません。なぜなら、ことばの背後にはそれを話す人々が育んでいる文化があって、更に誤解を恐れずに言えば、ことばとはその人達の社会を構築する技法であり、世界観そのものだからです。つまり外国語を学ぶとは、自分が普段話している言語や浴している文化とは異なる視点や物の見方、生きていく上での「複眼」を身に着け、人生を豊かにする営みでもあり、その意味では誰しもが学ぶ意味のあるものと言えるでしょう。

でもそれならば「第一外国語」、多くの人にとっては英語を既に学んでいるのだから、それで十分ではないか、という意見も聞こえてきそうです。勿論日本語以外に英語を知っているのは価値のあることですが、それだけでは点と点を結ぶ「線」としての比較しかできません。しかも英語(圏)と日本語(圏)は話者数の点でも、経済的そして政治的にも英語(圏)が圧倒的に優位な非対称の関係性にありますから、それを比較するとどうしても結論が極端なものになりがちです。例えば、日本は英語圏よりもこんなに劣っているとか、或いはこんなに特殊で、だからこそ素晴らしい、等といった具合です。そんな時にもう一つの言語や文化を学ぶと、特殊に見えていたことが意外とそうでもないと分かったり、優劣ではなくてただ多様なだけだったことに気がついたりします。点が3つ以上あって初めて「面」としての比較ができるようになる、とも言えるでしょう。それこそが、大学で第二外国語を学ぶ本当の意義なのだと思います。

➤ 中国語と日本語

さて、そのような視点で見ると、学ぶ言語は何語であっても意味があるのですが、ここではその中でも中国語を学ぶことについて書きたいと思います。日本で生まれ育った人にとって、中国語は最も親しみやすい外国語の一つと言ってよいのではないのでしょうか。それは日本で中国語に接する機会があるかどうかとは必ずしも関係なく、中国語が日本語と同じく漢字で書かれることによる所が大きいでしょう。例として、以下の語句を見て下さい。

中国经济政策之变迁／中國經濟政策之變遷

中国語を学んだことがなくても、漢字の知識さえあればこれが「中国の経済政策の変遷」という意味であることはすぐに分かるでしょう。これは中国語と日本語が漢字及び漢字語を共有しているためですが、その背景には中国と日本の長い交流の歴史があります。古代以来、日本が漢字・漢文を受容しそれを読み書きする中で、日本語には大量の漢語語彙が取り入れられました。この語句の中で言えば「変遷」等はその一例です。また近代には逆に、日本語から中国語へと主に西洋由来の概念を表す語彙が多く借用されました。上記の「経済」という語は、「経世済民」（世を治め民を救う）という漢籍に由来する文句を基に、西洋語の「economy」に対する訳語として日本で生み出されたものです。

それから「之」は現代日本語ではあまり使われませんが、中学高校で漢文訓読を学んだ人ならば、「の」を意味するということは知っているでしょう。実は、中国語も話し言葉ではこの「之」はもう使われなくなっているのですが、書き言葉には今でも残っています。こうした近代語彙や文語語彙は、新聞記事等の硬めの内容の文章に特に多いので、日本の学習者にとってはそういう中国語の方が読み易かったりもします（逆に言うと、話し言葉はそうはいきません）。これは中国語を学ぶに当たって、漢字文化圏で育った人間が極めて有利な点であり、ベトナム語や朝鮮・韓国語が漢字を使わなくなってきた現在では、事実上中国語圏と日本語圏の間にのみ存在している親近性と言えるでしょう。

ただ同じ漢字と言っても、上に挙げた例を見てもらえば分かる通り、その字体は日本語とは異なります。左側は「簡体字」と言って、現在中国やシンガポールではこれが正式な字体とされています。それに対して右側は「繁体字」と呼ばれ、日本で言う所の旧字体に当たりますが、こちらは主に台湾や香港で用いられています。一橋では基本的に簡体字で中国語を学んでいきますが、どちらにしても漢字の基本的な原理や書き方が分かれば、覚えるのにさほど苦労はしません。

他の初修外国語のことを悪く言うわけではないのですが、単語やその綴りを（英語の知識が多少役に立つとは言え）ほとんど一から覚えなければならないドイツ語やフランス語等のヨーロッパ言語や、文字を新しく覚える必要のある朝鮮語と比べると、中国語はこの点で圧倒的に楽です。また比較ついでに言うと、これらの言語に付き物の単語の語形変化（活用）も中国語にはないので、文法に関しても暗記しなければいけないことは多くありません。

このように書いてくると、中国語を選択すれば楽な事ばかりが待っているかのようですが、これだけで終わっては流石に後々「騙された」と言われかねないので、難しい部分についても正直に書いておかねばなりません。中国語の一番の鬼門は、何と言っても発音でしょう。とは言え、日本語は世界の言語の中でも音韻構造がかなり単純な部類に入るので、それに慣れていると何語を学んでもそれなりに苦勞するのですが、中国語の場合は個々の母音・子音を習得するのに加えて、「声調」が一つの大きな関門になります。

声調とは音の上がり下がりのパターンのことで、標準中国語では4種類が区別されます。入門時にはほぼ確実に目に掛かるであろう有名な例を先取りして挙げておくと、「ma」という音を高く平らに「mā」と発音すると「妈」（お母さん）、下から上へ上がり調子に「má」だと「麻」（麻）、低く抑えめに「mǎ」だと「马」（馬）、上から下へ下がり調子に「mà」だと「骂」（罵る）というように、声調によって意味が変わります。日本語でも「箸」と「橋」のようなアクセントの違いはありますが、声調が担っている役割はそれよりも遥かに大きいので、これをしっかり聴き分け／発音し分けられるようにならないと、文字通りお話になりません。一橋で開講されている初修外国語の中でも、声調のある言語は中国語だけです。ただ世界的に見れば、タイ語やベトナム語等も声調言語であり、実はそれほど珍しいことでもないのですが。

中国語には日本語の仮名のような表音文字がないので、この声調も含めて発音は「拼音（ピンイン）」と呼ばれるローマ字で表記され、これを用いて学習していきます（ただし台湾ではこの拼音を使っておらず、「注音符号」と呼ばれる独自の記号で発音を表記します）。例えば先程の「中国经济政策之变迁」の発音は、「Zhōngguó jīngjì zhèngcè zhī biànciān」となります。こうなると、途端に意味不明の文字の羅列ですね。けれども逆に言うと、中国語を聞く／話すとはこういうことです。日本語の知識がある人は、中国語を読む／書くに当たっては大きなアドバンテージがありますが、その分聞く／話すことになると急に難しく感じると思います。結果的に、どうしても漢字に頼って中国語を視覚的にばかり学習してしまいがちですので、拼音をしっかりマスターした上で、時には意識的に漢字の存在を忘れて勉強することが大切になってきます。

このように中国語は、日本語と近い部分と遠い部分とが混在する言語であると言えるでしょう。だからこそ、それを学ぶことは日本語自体の仕組みや、日本と中国語圏の交流の歴史を見つめ直すきっかけに満ちた経験でもあります。また、中国語圏の経済状況や日本との政治的な関係は、これまでもそうだったように時代によって変わっていきいますが、中国及び中国語を話す人々が日本や日本人と地理的・物理的に非常に近い存在であるという事実は、（少なくとも数千年のスパンにおいて）変わることはありません。そのような観点からも、皆さんには是非中国語を学んでみてもらいたいと思います。

➤ カリキュラムの概要と履修上の注意

ここからは一橋における中国語教育の具体的なカリキュラムについて、簡単に紹介して

いきたいと思います。まずレベルは初級・中級・上級の3段階に大きく分かれており、この順番に沿って履修することになります（中級の後に初級、上級の後に中級のように、逆の順番で履修することは原則として認められません）。

初級レベルの科目には、総合・速修・実践の3種類があります。「初級（総合）Ⅰ・Ⅱ」は週2コマ1年間の授業を通じてみっちり与中国語の基礎を学ぶもので、読む・書く・聞く・話すの四技能をバランスよく身に着けることを目標としており、法学部と社会学部で必修の初修外国語はこの総合を履修することになります（定員に空きがあれば、他学部の学生も履修可能です）。他の授業は全て週1コマで、「初級（速修）Ⅰ・Ⅱ」は総合と同じレベルの内容を駆け足（総合の半分の回数）で学ぶ授業です。それに対して、「初級（実践）Ⅰ・Ⅱ」は主に会話の練習に重きを置いており、基本的には総合や速修と同時に履修することを想定しています。総合と速修でも会話は行いますが、クラスの人数もそれなりに多いので、一人一人が練習できる時間にはどうしても限りがあります。実践の授業はそれを補い、実際の会話力を伸ばすために活用して下さい。

注意しておいて欲しい点は、これら初級レベルの科目はどれも中国語を初めて学ぶ、言わば「ゼロから」始める人を対象にしているということです。近年は、例えば御両親のどちらか（または両方）が中国語圏の出身で、家庭内で中国語に触れて育ったという方も増えてきていますが、そのような方は原則として初級科目を履修することはできません。中には「聞く・話すはある程度できるけれど、読む・書くは全くできないので初級から学びたい」という方もいると思いますが、「聞く・話す」の基礎があるだけでも初級の授業は退屈な時間が多いでしょうし、またゼロから始めている他の受講生と成績評価の上で不公平が生じてしまうからです。とは言え、自らのルーツに関わる言語を学びたいという思いは、とても素晴らしいものです。簡体字と拼音だけならば独学で習得することも不可能ではないと思いますので、その上で是非次に紹介する中・上級科目を履修して下さい。

初級を終えた方のために用意されている中級・上級レベルの科目は、講読・作文・会話の3種類（中級にはそれに加えて検定試験対策）に分かれています（年によって開講されていないものもありますので、シラバスを確認して下さい）。このレベルからは、中国語を学ぶ目的によって徐々に各々の重点が分かれてくると思いますので、自身の好みや必要性に合わせて自由に選択して下さい。こうした語学科目に加えて、全学共通教育では「中国社会論」や「中国文学」といった中国語圏の社会・文化に関する科目も開講しています。最初書いた通り、言語とそれが話される／それによって作られる社会や文化は切り離せない関係にありますので、これらの科目も並行して履修することで、更に理解を深めることができるでしょう。

また2024年度からは、「中国語短期海外語学研修」が始まりました。これは夏休みに実施する中国語圏への短期留学プログラムで、現在は台湾師範大学の中国語研修コースに参加する形を取っています。研修・滞在費用がかかるというハードルはありますが、日本で勉強した中国語を現地で実際に使いながら学ぶことができる貴重な機会ですので、是非参加

を検討してみてください。研修に参加するためには、「中国語中級（短期海外語学研修準備）」という科目（春夏学期隔週開講）を事前に履修することが条件になり、研修本体と合わせて7単位が認定されます。便宜上「中級」という名前が付いていますが、実際の語学研修では各自のレベルに合わせてクラス分けをしてくれますので、初級・上級レベルの方でも参加可能です。上でも少し書いたように、台湾の中国語と（一橋で主に教えている）中国の中国語は表記や発音等の面で違いがあり、また台湾では中国語以外の言語も使われています。それも含めて台湾の事についてはこの準備授業の他に、「台湾の歴史と社会」や「台湾文化論」といった科目でも学ぶことができるので、合わせて受講することをお勧めします。

以上簡単にではありますが、外国語を学ぶこと、中国語を学ぶこと、それを一橋で学ぶことについて書いてきました。中国語を身に着けたい、中国語圏の事を理解したい（単位を取りたい、ではなく）と望む方に対して、私達教員は協力を惜しみませんので、分からない事や知りたい事があれば、気軽に質問をして下さい。授業で皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。

文責：吉田真悟
(2025 年 9 月 30 日作成)